

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月5日(水)
部 会 名	小学校 外国語活動・外国語部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善（含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実）

テーマ

『 いつでも本番！ 主体的に思いを伝え合う活動を中心にした授業づくり 』

提案概要

当該学校の小学校5年生を対象に外国語の授業を実践した。当該地区の外国語研究部会では、子どもは、ことばを使いながら学んでいく存在であるという考えのもと、上記のテーマを大切にしている。本学級では、4月に外国語についての興味や意欲について知るためにアンケートを実施した。8割以上の児童が外国語を学習した方がよいと肯定的な回答をし、思いを伝えたい意欲があることが分かった。一方、自分の思いを正しく伝えられないという課題があることも分かった。

そこで本実践では、ドリルのような「練習」ではなく、「思いを伝え合う言語活動」を繰り返し行い、使いながら学べることを目指し授業を構成した。児童は、言語を使う過程で間違った表現をしてしまうことがある。そのときには、児童の伝えたい気持ちを大切にしながら、正しい言い方をたくさん聞かせたり、リキャスト（学習者の誤った部分のみを訂正して、自然な形で繰り返すフィードバック）したりすることで学習者自ら気づき、正しい表現を身に付けられるように指導してきた。

本単元は『New Horizon Elementary5』Unit6「At a restaurant.」であり、目標は「友達のお店に行き、食事の注文や値段を聞き取ったり、丁寧に注文したり値段を尋ねたりすることができる」であった。単元のゴールの課題にあたる「グループでレストランを開店する活動」に向けて、①カフェの店員や客室乗務員などになりきって注文を聞くなど、児童が英語を使いたくなるような目的・場面・状況を設定したり、判断が必要になったりする言語活動、②スーパーのチラシを用いた数字のインプット・アウトプット活動、③言語活動における中間指導、④一人一台端末の活用（録音を基に自分の発音を繰り返し確認、文字作成ソフトの文字起こし機能による発音の正しさの確認）、⑤他教科との連携、⑥振り返りシートの活用などの6つの手立てを意図的に仕掛けた。

第1時では、4年生の既習事項である「What do you want?」と、本単元の「What would you like?」を具体的な場面の中で比較させることで、相手意識に基づいた「丁寧な言葉遣い」の必要性に気付かせることができた。第2時では、食事と注文のやり取りに向けて、客室乗務員になりきり、機内食のカードを使用し、「What would you like, beef or chicken?」と尋ねるロールプレイをした。その際に、機内のアナウンスを流すなど、児童がリアルなやり取りの場面に入り込めるように目的・場面・状況を設定した。第4時では、大きな数の言い方に慣れるために、スーパーのチラシを利用した。

「How much is it?」と数の両方の表現を導入したため、それぞれのインプット量が少なくなってしまう、正しく表現できない児童がいた。そこで、学級担任であることを生かし、数字の言い方については、算数でも使うことで十分慣れ親しめるようにした。第5時では、スーパーでの買い物の場面を設定し、グループでやり取りの練習を行った。二次元コードで決済することで、よりリアルに近いやり取りの場面を想定させた。グループの児童同士で、分からない表現を教え合う姿が見られた。児童からも、前と比べて発音良くスラスラ言えるようになったとの肯定的な振り返りがあった。第6時では、お客さんに喜んでもらうお店にするにはどうしたらいいのかをテキストマイニングを用いて可視化し、聞き取りやすい英語で話すことが大切であると気付かせ、相手意識をもたせることができた。第7時のゴール課題ではグループでレストランを開店する活動を行った。ターゲットセンテンスに加え、前時で共通理解を図った相手意識を大切にしながらやり取りすることができた。

本実践の成果としては、児童の振り返りの内容や、「英語を使った度」が第1時の59.7%から第7時には83.8%へ上昇していることから、言語活動を繰り返し行うことで、児童が自身の成長に気付けるよ

うな授業づくりができた。また、学級担任であることを生かして、児童の実態や興味・関心に応じた授業づくりをすることができた。課題としては、活動が盛り上がる一方で、英語の発話量が落ちてしまったり、単語だけの発話になってしまったりすることが挙げられる。リキャストなど暗示的指導を中心に行ってきたが、中間指導において児童の具体的な間違いを取り上げたり、児童の言ったことを板書し、音と目で違いに気付かせたりするなど、明示的指導も取り入れるとより効果的であったと考えられる。

まとめとして、言語活動を繰り返し行うことで、言語材料そのものだけでなく、どう話したら相手に伝わるのか、どのように聞いたら相手の思いを理解できるのか、目的・場面・状況に応じて判断する力の育成にもつながると考えられる。

質疑応答

Q：振り返りシートはタブレットと紙のどちらを使用したのか。

A：タブレットの方が比較的抵抗感なく取り組める児童もいるため、タブレットを使用した。

Q：これから明示的指導と暗示的指導のバランスをどうしていきたいか。

A：普段は、リキャストなど暗示的指導を中心に行うが、ここぞという場面で明示的指導を用い、中間指導において児童の誤った表現を取り上げ板書したり、間違いやすい表現を並べたりすることで、児童自身が違いに気付けるようにしていきたい。

協議の柱及び協議概要

協議の柱「自分の思いを伝えたいくなるような学習環境づくり」

協議は、話し合いが活発になるよう2回に分けて行った。1回目は小・中学校合同のグループとし、外国語の授業における小・中学校での共通点・差異点について協議した。共通点としては、「身近な話題が興味関心を引き付ける」「目的・場面・状況が作りやすい場面では実践形式の言語活動に重点を置く」などの話が上がった。差異点としては、「小学校はロールプレイややり取りなどの体験的な活動を通して、ターゲットセンテンスに慣れ親しむが、中学校では文化的背景を考慮して情報を整理するなどより高次の学習を行う」「小学校は書くことに重きを置いていないが、中学校開始時点で、アルファベットが4線に正しく書くことができている前提で教科書が始まるため、書くことに関してギャップがある」などの話が出た。

2回目は校種別のグループとし、具体的な実践例や困り感、課題感などについて協議した。上手くいった実践例としては、「デジタル機器の活用が子どもたちの興味関心を深められている」「動画撮影などにより児童がそれを見返すことで客観視でき、教師も評価として利用できる」「チャンツや歌で耳に残す」など数多くの意見が挙げられた。一方、困り感として、「AIとの向き合い方」や「評価のあり方」なども挙げられた。外国語専科の視点から「学級担任との密な連携の必要性」についても話題に挙げられた。

まとめ概要

助言では3つのポイントが挙げられた。1つ目は、学級担任としての指導の視点である。他教科との連携は、学級担任だからこそできるものである。今回は、算数と連携したが、他にも道德の『礼儀』や総合的な学習の時間の『多文化共生』などと絡めることで、「Would you like～？」のような丁寧な表現を使う必然性に気付かせることもできる。また、担任の深い児童・生徒理解によって、目の前の児童に応じた言語活動を設定することで児童の見方・考え方をさらに促進させることができる。

2つ目はAIの活用の視点である。音声認識機能で文字起こしをして発音の正しさを確認するだけでなく、AIを対話の相手として活用することでリキャストなど、即興的なやり取りの練習にも生かすことができる。

3つ目は言語活動のあり方である。次期学習指導要領で言語活動が「思考・判断・表現を育成する活動」と「知識・技能を育成する活動」の2つの要素に整理される方向性が示された。これにより、知識や文法を言語活動から切り離して指導するのではなく、本実践のように「言語活動を通して知識・技能の力をいかに伸ばすか」という視点が今後さらに重要になる。

本実践のように、明示的指導と暗示的指導のバランスを整えながら「英語で思いを伝えたい」という意欲と力を小学校から中学校へつないでいけるよう期待している。